

2017 年度学位申請論文（博士）

近世初期の京釜研究—辻与次郎を中心に（要約）

Kyoto Kettles in Japan's Early Modern Period  
: Mainly Focusing on Tsuji Yojiro

京都造形芸術大学

芸術研究科芸術専攻

伊住 禮次郎

鎌倉時代中期頃成立とされる『塵袋』に「此ノ国ニカマヲバ湯ワカスウツハモノトス」とあるように、釜は湯を沸かすための器物である。ただし、煮炊きに用いる日用道具の総称というのが一般的な認識ではないだろうか。

しかし、茶の湯の世界においては、単に湯を沸かすための道具という認識以上の評価が与えられている。例えば、幕末の大老・井伊直弼は、釜を「一室の主人公」と表現し、釜を吟味することの重要性を示している。文様や姿形に多様な表現がみられる上、茶の湯の世界では鉄釜の荒れた膚合いを愛でるような独特な感性も育まれてきた。釜は、日本特有の美的嗜好が込められた実用の美術品と換言することもできるだろう。

本論文では、茶の湯に用いる釜の中でも近世初期の京釜を研究対象として、世に「天下一之茶之湯者」と称された千利休の釜師・辻与次郎を中心に論じている。京釜は、三条釜座（現・京都市三条釜座）を拠点に制作された釜の総称である。同地を拠点とした釜師は幾人もいるが、その中でも辻与次郎を中心に上げる理由は、与次郎が茶の湯釜制作にかかる「釜大工」として、初めて「天下一」を号した人物であったことによる。「天下一釜大工」を名乗った与次郎は、その代表的人物として適当だと考えた。本研究の目的は、茶道史の展開を追いながら、三条釜座の組織構造や、与次郎の生産体制といった近世初期の京釜における未解明点の実態を明らかにすることである。以降、本稿を構成する各章ごとにその概要を紹介していきたい。

## 序章

はじめに、与次郎及び京釜に関係する先行研究を整理した。大正三年（一九一四）刊行の香取秀眞著『茶之湯釜図録』を先駆的書物として紹介し、その後は刊行年順に主要な論考を示している。研究目的は前述の通りで、主な研究方法として釜の使用環境の変遷、三条釜座の組織構造、与次郎の弟子筋にあたる釜師の検証という三点を掲げている。

## 第一章

第一章ではまず、「釜」そのものの歴史及び語意の変遷などを紹介した。金属製の釜が使用されるようになったのは奈良時代にまで遡り、「釜」という語句が古くから湯を沸かす道具を示すものであったことを論じている。また、茶の湯釜を研究する上では、茶の湯文化史の展開はもちろん、茶の湯釜を使用する環境の変遷も重要である。そこで、湯を沸かすための熱源を包有する装置である「風炉」や「囲炉裏（炉）」の展開について考察し、茶道史における釜の使用環境の変遷についても論じた。

## 第二章

第二章では、茶の湯釜を産地ごとに論じている。喫茶用の道具として記録にあらわれる早い例は、筑前国芦屋（現・福岡県芦屋町）で作られた芦屋釜である。はじめに、芦屋釜の盛衰について紹介した。次いで、下野国天明（現・栃木県佐野市）で作られた天明釜をとりあげた。「西の芦屋」に対し「東の天明」と称され、十六世紀中頃には茶会で使用されたと考えられる。以降、茶の湯釜の姿形は多様化し、釜の「膚合」を愛でる意識が成熟する。茶の湯文化史上、十六世紀後半は重要な転換点であり、京釜が隆盛する時期にあたる。

京釜の歴史的背景を認識するためにも重要な二大産地である。

また、与次郎に関する史料を整理した。それらを通観した上で、与次郎のほか藤左衛門・弥四郎という釜師が利休の釜を制作したという記録がある『釜師由緒』という史料に注目する。その理由は、両名の作品が後世に「与次郎作」と極められた（鑑定された）という記述があることによる。その作品特定を試みることは、与次郎と同時代或いは同工房の作品をつきとめることに通じる可能性もあり、膨大な作品数を残す与次郎の研究を進める上で有効なアプローチではないかという見解を示した。

### 第三章

第三章では、『釜師由緒』について考察した。元禄十三年（一七〇〇）に西村道治（以下、道治）が著したという史料である。茶の湯釜を制作する釜師の情報等を記録したもので、近世初期に活躍した釜師に詳しい。原本の成立年代が元禄年間まで遡る史料で、そのような内容を持つものは他に見当たらないので、貴重な記録である。

ただし、管見の限り、道治筆の原本は失われている。現在には二次史料である写本等が伝わるのみだが、先行研究では何を底本に論を展開しているのかさえ要領を得ないことも少なくない。先行研究では唯一、香取秀眞が著書『新撰茶之湯釜圖録』（一九三三）において、「故今泉雄作翁の秘蔵本の『銘器秘録』二冊本の坤の巻に収めたもので、最も信頼すべき原書に近いもの」という明確な見解を述べている。しかし、その根拠については残念ながら示されていない。

釜師に関する基礎史料として活用されてきたにも関わらず、以上の問題意識をもった具体的な史料批判は行われていないのである。そこで、同史料に関する研究史をたどりつつ、現時点で確認することのできる諸本の整理を試みた。結果として、『釜師由緒』に付属する史料には、三つの系統があることを見出すことができた。①名物釜とその所有者を列記した記録、②釜の絵図が描かれた記録、そして、①及び②とは別系統の絵図資料が付す記録である。それらを系統別に整理した上で、各史料に所収された『釜師由緒』に該当する書写箇所を比較検討し、原本の内容に近い史料を提示している。

### 第四章

第四章では、京釜の制作拠点である三条釜座について考察した。特に、三条釜座の座法や組織構造に注目している。与次郎の活動を考える上で、三条釜座にどのような掟があったのかという視点は、茶道史上、ほとんど顧みられなかったものである。結論として、与次郎・藤左衛門・弥四郎はいずれも、座の掟に従って活動した鋳物師であり、与次郎を棟梁とする工房のような体制で制作していた可能性があることを指摘している。

また、前章で考察した『釜師由緒』に付す「名物釜所持名寄」（前掲①に該当）に、「藤左衛門」と「弥四郎」作とする作品が列記されていることにも注目した。同史料は、記載された人物名などの情報から推察するに、十八世紀中頃には原本が成立したと考えられるもので、その記録を基に現存作品の比定を試みた。結果的に、藤左衛門作と推定可能な作品二点、弥四郎作と推定可能な作品二点を示すことができた。今後、与次郎作品の基準作

を検討する上においても、重要な一歩だと思われる。なお、図版に掲げた作例に共通するのは、作意的に「荒れ」を施す意識があることだと考えている。

## 結章

各章についてまとめると、第一章では釜という器物の歴史に触れ、茶の湯釜の発生までを通観した。風炉や囲炉裏の史の変遷にも言及しており、茶道史的観点から同時代の展開を追うことができたと考えている。第二章では、芦屋釜・天明釜という名高い茶の湯釜の展開を確認した上で、京釜及び与次郎について考察した。第三章では、近世初期の釜師に詳しい『釜師由緒』の諸本整理をすすめた結果、付属する史料に三つの系統があることを見出した。系統別に比較検討した上で、原本の内容に近い史料についての見解を述べている。第四章では、京釜の制作拠点である三条釜座の座法等について論じた。また、『釜師由緒』に付属する「名物釜所持名寄」を基に藤左衛門・弥四郎の作品特定を試みた。その上で、与次郎が釜を制作する上での体制に関する見解を述べている。

近世初期の京釜における特筆すべき点は、注文主が紙形を切って注文するような、受注生産の体制が確立されたことである。これは従来にみられない展開で、当地の特徴を強く有する芦屋釜や天明釜に比べて変化に柔軟であったと考えられる。結論としては、オーダーメイドの茶の湯釜であったという点を、京釜の特徴に掲げている。また、利休没後百年という利休回帰の機運が高まった頃に、与次郎の名声が高まったことで、藤左衛門と弥四郎の作品も「与次郎作」に集約されたのではないかという見解も示した。

本論文の研究成果としては、『釜師由緒』の諸本整理を進めたこと及び、藤左衛門・弥四郎の両名の存在をある程度実証できたことを掲げておきたい。いずれも、与次郎及び京釜の研究を前進させるために重要なプロセスだと考えている。大きな課題として残るのは、文献史料の調査に追われ、作品調査を十分に行うことができなかった点である。関連作品の調査は今後取り組むべき課題として、引き続き研究を進めていきたい。